

Monsanto

について



モンサント

その地理、気候、そこに生息する動植物という点から見れば、セーラ・ダ・ガルドゥーニャ (Serra da Gardunha) (ガルドゥーニャ山脈) の麓とポンスル川 (Rio Ponsul) の間にはさまれたベイラ・インテリオール (Beira Interior) の平原は、ポルトガル北部と南部のちょうど中間地帯にあたります。それを岩山の上からはるかに見下ろしているのが、長い歴史を誇るモンサント (Monsanto) の村です。

言い伝えによれば、この難攻不落の砦によって、村は紀元前2世紀にローマ人の包囲に7年間もちこたえたと言われています。これを記念して、毎年5月3日には十字架祭 (Festa das Cruzes) が村人たちによって行われています。

この村は、ポルトガルでも屈指の奇観で訪れる者の目を楽しませてくれます。山の斜面に広がる集落は、よく見れば家々の壁に天然の御影石の大岩がそのまま用いられています。なかには、一枚岩がそっくり屋根となっているものがあります。そのため、この地の家は俗に「一枚瓦の家」と言われます。

村をめぐる急な細い道には、一族の紋章を掲げた館やマヌエル様式の門が彩りをそえ、医者にして作家であったフェルナンド・ナモラ (Fernando Namora) がかつて医者として働きながら暮らしていた家もあります。事実、彼はこの家で小説『たった1つのオレンジ』 ("Retalhos da Vida de um Médico ") の構想を練りました。村の家々からひととき高くそびえ立っているのが、14世紀建造のルカーノの塔 (Torre de Lucano) です。塔の頂に見える銀の雄鶏は、1938年に行われた「ポルトガルで最もポルトガルらしい村」を決定するコンクールで、土地に根ざした文化によって見事栄冠に輝いたモンサントの村に与えられたトロフィです。

城へと続く切り立った崖からの眺めは、この地方で屈指の美しさを持つものとされています。